

用された科目（7）、②オランダ植民地期の初等学校用教科書を改訂した教科書が使用された科目（2）、③日本の国民学校教育を参考にして教科書が編纂された科目（3）という3グループに分類できた。

また教科書は「大東亜」理念を殆ど反映していないことが明らかになった。グループ③の教科書でさえ、日本の国民学校教育の特徴である心身一体の教育方針を取り入れてはいるものの、教授事項は一般的な知識と精神の向上を述べるにとどまる。つまり教育政策と、1943年末までの国民学校用教科書には明らかな差異が見受けられる。一貫して「大東亜」理念に基づく内容が確認できるのは、現時点では、1944年5月に発行された修身の教科書ただ1冊である。またこれ以降、日本占領期の間にジャワで日本語と唱歌以外の教科書が新たに編纂、発行された可能性は低い。

以上のことより、第1に日本占領期ジャワの国民学校教育は1943年末から新教科書の発行にいたる1944年前半の間に大きな転換期があった。第2に「大東亜」理念に基づく教育政策と教科外教育、またとくに日本語教育を題材に、日本占領期をオランダ植民地期と独立後のインドネシアを断絶する特異な教育が実施された期間とする従来の定説を再考する機会を持つべきだといえよう。個別の実証作業に埋没するのではなくインドネシア教育史の観点から見直すことが必要である。

イソップの最期に関わる寓話

岩 男 久 仁 子

イソップの死について表現されている寓話は、現在伝承されているイソップ伝では「鼠と蛙」となっている。しかし、現存する最古の写本（AD1世紀後半から2世紀はじめ）「G本」では「鷲と甲虫」という寓話となっている。「G本」にも「鼠と蛙」は収録されているが、「鼠と蛙」の話から読み取れるイソップの死は、偶然の出来事にすぎない。しかし「鷲と甲虫」ではイ

ソップの死の本質に関わる寓話であると読み取れる。長い伝承過程において、イソップの死の本質「驚と甲虫」が忘れ去られ、単純な「鼠と蛙」が前面に出てくるようになった。なぜこのようなことが起こったのか、「G本」におけるイソップ伝を分析することによって探ってみた。

「G本」のイソップ伝全体を通じて、イソップとイシス女神（あるいはムーサ女神ともいわれている）との浅からぬ因縁とアポロン神の対立が重要な伏線となっている。イソップは口が利けなかったが、イシス女神により口が利けるようになった。すると、イソップはイシス女神に対して信仰をもち、この女神のために社を築いた。イソップは、アポロン神より格が下である女神を祀ったため、アポロン神の怒りを買ひ、運命の糸を操られ、アポロンが主神であるデルフォイの地に呼び寄せられた。そこで、アポロンは、イソップに思慮を欠いた言動・行動をとらせ、デルフォイ人の反感を買わせ、無実の罪を着せ、死刑にさせた。この経緯が「驚と甲虫」に表現されているのである。

「G本」の作者は、イソップは自らの知恵によって奴隷身分から「自由」を勝ちとった自主独立の人物であり、また、デルフォイ人はアポロン神に庇護されているだけで、本性は奴隷的であると捉えられている。このような対立が、貴族と民衆、自由人と奴隷の対立という伝統的な強固な図式を示している。そして、イソップの口から、デルフォイ人とイソップの関係を、みせかけの自由人こそ本物の奴隷と、みせかけの奴隷こそ本物の自由人という図式に表現した。作者にとってはこのメッセージは、イソップの非業の死という結末と裏合わせの形でしか発することができなかった。それらを折り込んだ寓話が、「驚と甲虫」のほうである。しかし、こちらに意図されたメッセージは、後世には、理解されがたく、次第に消去されていったのである。